

「城踏」は20年前の1999年3月に発行を始めました。ちょうど姫路市公式サイト内に各課のサイトが開設できるようになった時期でもあり、当初からPDFを主にして紙でも発行する方針にしました。PDFは城郭研究室サイトからダウンロードできるようにしましたが、すぐに紙媒体だけになりました。当時PDFの利用が姫路市で禁止されたためでした。しばらくは紙配布を続けましたが、時代の流れでいまはPDF配信のみとしています。

さて、「城踏」No.1では、本多家の家老中根氏の子孫宅で発見された「播州姫路城図」（以下、大絵図とする）に描かれた三の丸向屋敷とその庭園について記事にしました。大絵図は、それまで不詳だった内曲輪のすべての建物配置や庭園の存在を明らかにした画期的な史料だったからです。ちょうどその頃、有志による酒井忠以の「玄武日記」の翻刻進行中でもあり、向屋敷庭園での茶会記録がわかったタイミングだったのです。つまり、大絵図と古文書がうまくリンクでき、三の丸



「播州姫路大絵図」向屋敷部分

御殿での大名と家臣の営為が浮かび上がったのです。これを機に、城郭建築の外観と防御機能の見立てに収斂していた姫路城の評価が、近世城郭として謹厳なものになる期待をこめました。

そして城郭研究室では、大絵図に御殿が描かれた場所の想定域で物理探査を実施し、大絵図の信憑性を科学的に裏付けようとしてきました。しかし、御殿と庭園の存在を裏付けるだけの明確なデータを得ることはできませんでした。ところが、埋蔵文化財センターによる動物園内での発掘調査では池の中

「藩主の風流」から20年

島と汀に想定される地点で現地表面から約50cm下で4点の石が出土しました。1点は長さが130cmを越えるもの、その他3点はいずれも最大長で70cmを越える石でした。また3点が流紋岩系の石材で、城内の石垣に使用されているものとは明らかに異なり、現在でも庭石に用いられる石材でした（『城郭研究室年報』Vol.12、2003）。調査区は狹隘でしたが、動物園と三の丸広場には大絵図に描かれたように池と中島があり、島の護岸には石組による修景が施されていた蓋然性があり（西桂「姫路城三の丸向屋敷跡庭園遺構」『歴史と神戸』56-1、2019）、大絵図の庭園描写の信憑性も高まりました。

そして平成27年から始まった「姫路城公式ガイドツール整備調査研究事業」の中で、西桂氏ら庭園研究者による向屋敷跡庭園の復元が行われました。「玄武日記」の茶会記事（安永7年〈1778〉正月14日条）を庭園の専門家の目を通して読み直すと、例えば、「流憩渡」から見せた「玉潤滝」とは、中国宋代の玉潤の水墨画に描かれた五台山の石梁のような景観を描写した絵に因み、滝の上部に石橋を架けた滝石組だとし、庭園様式の一つであったと述べています（西前掲論文）。庭の植生を復元するのはかなり困難だったようですが、それでも「醗醱塘（とびとう）」「草王砌」はその名からそれぞれトキンイバラ、クサノオウが植えられていたことが想定できるそうです。20年前の第1号発行時点では全く手も足も出せなかった分野について、このような指摘が得られたというのは大きな進歩といえるでしょう。

その成果として制作された復元CGを、このたび公開することができました。今後も少しずつ研究を積み重ねて、新たな成果を反映させていきます。



向屋敷の復元CG（南から俯瞰）

復元CGは「姫路城アーカイブ」
<http://himeji-jyokaku.jp/>
 で閲覧可能